様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０１１２０

研究課題名（和文）鑑賞支援サービス充実のための、学芸員向け映像自作ワークショップの開発

研究課題名（英文）The Development of Self-made Video Workshops for Curators to Enhance Appreciation Support Services

研究代表者
西岡　貞一（Nishioka, Teiichi）

筑波大学・図書館情報メディア系（名誉教授）・名誉教授

研究者番号：６０４３６２８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、映像制作が非専門の学芸員・博物館職員が映像制作の知識とスキルを習得するための映像制作支援パッケージ（ひな形、制作手順）の提案を行った。インサートカットや状況説明カット等はギャラリートークの映像化に有効である一方、習得容易性が高いという仮説の検討を行なった。現職学芸員の協力を得てワークショップを実施した。その結果、インサートカット編集を活用したギャラリトーク映像を制作することができた。その制作に映像制作支援パッケージが手助けになったといった回答を得た。本提案の「ひな形」「制作手順」は映像制作初学者にとって、映像制作の手がかりとなるがことが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
博物館・美術館からの情報発信は新聞や雑誌に代わり、インターネットを通じた映像発信の重要性が高まっている。特に2020年のコロナ禍を機に博物館・美術館のSNS上での映像発信が拡大した。しかし、映像の制作は各館の担当者がそれぞれ試行錯誤を繰り返しているのが現状である。
本研究が提案した映像制作支援パッケージ（ひな形、制作手順）により、学芸員による自作ギャラリトーク映像の質的・量的充実が期待できる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we proposed a video production support package (templates and production procedures) to help curators and museum staff, who are non-specialists in video production, acquire knowledge and skills in video production. We examined the hypothesis that insert cuts and situational explanatory cuts are effective for visualizing gallery talks while being relatively easy to master. Workshops were conducted with the cooperation of current curators. As a result, participants were able to produce gallery talk videos using insert cut editing. Responses indicated that the video production support package was helpful in this process. The proposed "templates" and "production procedures" were shown to be valuable tools for beginners in video production.

研究分野：博物館情報・メディア論

キーワード：映像制作　博物館　学芸員　映像制作支援　ギャラリートーク　ひな形　博物館情報・メディア論　メディア教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

博物館・美術館からの情報発信は新聞や雑誌に代わり、インターネットを通じた映像発信の重要性が高まっている。特に 2020 年のコロナ禍を機に、ミュージアムの SNS 上での映像発信が拡大した。我々が東京 23 区内の公立博物館（歴史系、美術系）42 館を対象に行なった調査では、その約７割が映像による情報発信を行なっていた。（西岡 他 2021）　一方、YouTube を用いた映像発信を行う博物館を対象に行なわれた調査では、映像制作・発信の実務者は、約７割が学芸員等の正規の専門職員が占めるとの結果が報告されている。（松葉 2022）　そして、いずれの調査結果からも映像発信が映像制作担当者の試行錯誤に支えられている現状が読み取れる。今後の博物館における映像発信の質的・量的充実に向けては、学芸員や博物館職員が映像制作の知識やスキルを修得するための映像制作支援プログラムの充実が求められる。
我々は学芸員を対象とした映像制作支援プログラムの開発に取り組んでいる。（西岡　2018）その過程で学芸員の映像制作を容易にするためには、博物館向けの「ひな形（template）」が欲しいとの要望があった。

２．研究の目的

本研究では、映像制作の経験が少ない学芸員が博物館業務において映像発信を行うための知識とスキルを修得するための映像制作支援パッケージ（ひな形、制作手順）の開発を行う。
そして、現職の学芸員による映像制作実践を通じて、映像制作支援パッケージの有効性と課題を明らかにする。

３．研究の方法

（１）調査

映像制作支援を行うために、映像制作が未経験な学芸員でも制作可能性の高い、ギャラリートーク映像のひな形（映像構成・表現スタイル）を設計する。ギャラリートーク映像といっても、解説のナレーションの合間に学芸員がインタビューに答えるもの、人物は登場せずにテロップにより展示解説を行うもの、学芸員自身が展示解説を行うもの等様々なスタイルがある。
ひな形の設計には、映像制作の専門家が制作したギャラリートーク映像を参考にした。ギャラリートークを題材とした既存の放送番組や、映像制作の専門家による SNS 上の映像約 300 点を収集・分析した。収集・分析対象とした放送番組を（表-1）に示す。

番組名	チャンネル、放送時間
日曜美術館	NHK Eテレ　日曜　９時
アートシーン	NHK Eテレ　日曜　９時45分
新新美の巨人	テレビ東京　土曜　22時
ぶらぶら美術館・博物館	BS日テレ　（放送終了）
私の芸術劇場	東京MX　（放送終了）

表 1　収集対象の放送番組

SNS 上の映像については、東京国立博物館、国立西洋美術館、国立近代美術館、江戸東京博物館等の YouTube チャンネルの中から、映像制作の専門家によって制作されたと推測できる作品を選択し視聴した。
その中で用いられている表現技法の中で、映像制作未経験者にとっても修得可能なものを我々のこれまでの支援経験から判断した。我々は学芸員を対象とした映像制作ワークショップをこれまでに４回（２０人）実施した。例えば、展示室を移動しながらのギャラリートークは撮影の難易度が高いため映像制作の参考映像としては相応しくない。MC と解説者など登場人物が複数登場する場合、カット割が必要になり、編集も複雑になるため、映像制作の参考映像としては相応しくないと判断した。

（２）開発

学芸員が自作するギャラリートーク映像の「ひな形」の要件として以下を提案した。
①　ナレーションやインタビューではなく、学芸員がカメラの前でギャラリートークを行う。
②　学芸員が動かずに固定カメラに向かって語りかける。（ストレートトーク）
③　ギャラリートークの内容に関連する映像をインサートする。

「ひな形」を具体化するため、実際の博物館展示とギャラリートークを用いて、ギャラリートーク映像の試作をおこなった。試作を通じてモチーフ（題材）による表現特性や、素材の要件などの検討を行った。
神奈川県立歴史博物館（2021 年度）、那覇市歴史博物館（2022・2023 年度）のご協力をいただき、以下６種類の代表的展示資料のギャラリートー映像を試作実験した。１）文書資料、２）冊子体資料、３）絵画資料、４）美術工芸品（衣装）、５）美術工芸品（宝物）、６）ジオラマ模型。

「ひな形」の素材として那覇市歴史博物館における試作を通じて、ギャラリートーク映像の制作に関して以下の知見が得られた。

① 非来館者向け映像は博物館内で使用する鑑賞支援映像とは異なり、博物館の周囲や展示会場の様子を伝えるための状況説明カットが有効である。
② 学芸員による映像の自作においては、登場人物が複数になると編集時にカット割が必要になり難易度が高い。
③ 動きながら解説を行う学芸員の撮影は、照明やピント調節の点で難易度が高い
④ ドリー撮影やチルト撮影は難易度が高い。同様な表現効果の実現には、編集時にキーフレームを用いることが有効である。
⑤ 学芸員による映像制作は、その専門性が生み出すストーリーの具体性や撮影対象へのアクセス性の高さ等により魅力的な映像が期待できる。

那覇市歴史博物館において映像素材の範囲を三段階で試作し、ギャラリートーク映像の表現力と制作負荷の関係を示す資料映像を作成した。
１）展示資料のみ、２）展示資料 ＋ 自館収蔵資料、３）展示資料 ＋ 自館収蔵資料 ＋ 外部資料（他館収蔵資料・関連ロケ等）

東京都写真美術館と共同で、「ひな形」制作のための「制作手順」の設計を行った。通常の映像制作では４名体制（MC、映像ディレクター、カメラマン（照明）、音響）が一般的である。一方、本提案では学芸員が一人で映像を自作することを目指している。東京都写真美術館での撮影を通じて以下が明らかになった。
① ギャラリートークを行う学芸員が移動しない場合は、カメラと照明は固定できるためカメラマンと照明を学芸員自身が行える。
② ワイヤレスマイクの使用により、音響スタッフが不要になる。
③ ギャラリートークの撮影は、常に学芸員の所属する博物館で行うため。照明や録音の条件設定を毎回行う必要は無い。

（３）評価
練馬区立牧野記念庭園の３名の学芸員が映像制作支援パッケーを用いてギャラリートーク映像を制作した。現職学芸員が日常の業務の中でも取り組めるよう企画・撮影・編集の実践は各自のスケジュールに合わせて個別に行った。2023 年 12 月から 2024 年 3 月にかけて、対面で２時間程度の解説・議論を 4 回実施した。この他に Q&A 等は zoom 等を用いてオンライン形式で行った。撮影には SONYα7CⅡ、編集には Adobe Premiere Pro を使用した。

４．研究成果
（１）ひな形
本研究で開発したギャラリートーク映像の構成の「ひな形」を（図-1）に示す。上から下に向かって映像が進行する。それぞれの長方形は、各カットの位置付けを示す。ギャラリートークを行う学芸員を撮影したマスターカット、マスターカットの内容に対応したインサートカットをいくつか挿入する。マスターカットの前に状況説明カット、最後にエンディングのカットを繋げる。
① インサートカット
インサートカット(insert cut)編集はギャラリートーク映像の他インタビュー映像などでも利用される手法である。メインカット（一連の解説）の途中に、話題に上がった内容の別のカットを挿入（insert）することで、話の内容を分かりやすくする時に使用される。
② 状況説明カット
映像の冒頭で、後に続くカットが何処の何を撮影したものなのかを説明するためのカットである。来館していない視聴者に対して、博物館の規模や周囲の雰囲気、展覧会会場の雰囲気や作品の展示方法を伝えることで作品を理解し鑑賞を楽しんでもらうことができる。
③ エンディングカット
余韻や、展覧会の具体的な情報を伝える

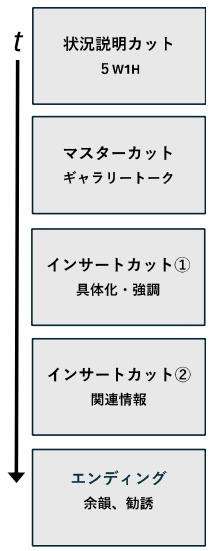

図 1 ひな形

（２）制作手順（ワークフロー）
ひな形に基づいてギャララリートーク映像を制作するための制作手順を確立した。
１）本論に相当するギャラリートークの撮影を行う。２）その内容を整理しインサート用のカットを撮影する。３）ギャラリートーク部分の撮影の後、ギャラリートークの背景等を伝えるために、状況説明カットを撮影する。４）最後にエンディングカットを撮影する
各カットの関係を（図-2）に示す。

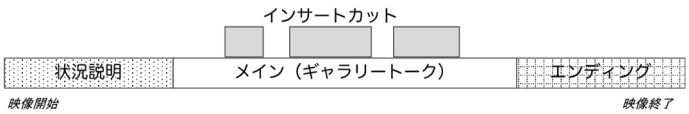

図 2 「ひな形」のカットの関係

（3）映像制作支援パッケージ（ひな形、制作手順）を用いて、3名の学芸員が各自1本ずつギャラリートーク映像を制作した。「牧野富太郎の印鑑」(2分39秒),「スエコザサ」(2分4秒),「牧野庭園の楽しみ方　～コーヒー編～」(2分1秒)
今回の実践で制作した3本のギャラリートーク映像は、いずれも学芸員の解説内容にふさわしいカットがインサートされている。カットがインサートされる in 点 out 点のタイミングも解説内容にマッチしている。これらのことから、今回使用した映像制作支援パッケージには一定の制作支援効果があると考えられる。

（4）3作品の中から「牧野富太郎の印鑑」を題材に、学芸員による自作映像の魅力を分析する（図-3）。ギャラリートークを撮影したマスターカットでは、牧野博士がぐるぐる巻いた“の”の印鑑を使用していたエピソードを取り上げ、博士の人柄のユーモラスな一面が語られている。
展示ケース越しでは、近寄ることができない『“の”の字」の印面を間近で見るカットがインサートされている。展示室には展示されていない、実際に手紙に押された「印影」がインサートカットにより紹介されている。本実践によるギャラリートーク映像からは、展示室とは別の形で、博士のユーモアあふれる人柄を実感することができる。

状況説明カット「牧野記念庭園全景」

マスターカット「ギャラリートーク」

インサートカット「牧野博士の印鑑」

インサートカット「押印した封書」

エンディング「展示全景」

図 3　映像「牧野富太郎の印鑑」構成

（5）牧野博士の封書の例に見られるように、学芸員は展示されている資料の他にも様々な資料があることを知っている。そしてそれらの資料を活用する自由度は、外部の映像制作者と比べて高い。映像を学芸員が自作することにより、情報量が豊富で多様な視点を持つギャラリートーク映像が期待できる。

（6）映像制作を体験しての1）気づき、2）今後の映像制作の継続の可能性、3）映像パケージに対する要望の3点について、振り返りインタビューを実施した。各自20分程度 zoom によりオンラインで行い、その内容を実践協力者の了解を得て録音し文字起こしを行った。その要旨を（表-2）に示す。

① 収穫・気づき
「今後は十分な長さで撮影をしたい」「インサート用カットとギャラリートークの内容のつながりが重要」「動画とかを見る見方が少し変わってきました」「アップで撮ると全然画の感じが変わってくる」等の記述は、インサートカットや状況説明カットといった映像文法に対する知識の深まりを示唆している。

② 今後の取組
本研究では業務における映像制作の実践・継続を支援する映像パッケージの提案を目的としている。インタビューでは「企画展の解説や、記念館の常設展の解説映像」等の具体的なプランが述べられており。映像パッケージの有効性が示唆された。

③ 映像パッケージの課題その有効性を示唆する回答が得られた。映像の構成を講演や論文との類似性で解説するとわかりやすい。
放送番組やプロの作品より、学芸員の自作映像の方が多少稚拙でも身近に感じられて参考になる。

（7）事前事後アンケート
ワークショップに関しての事前事後アンケートの結果を（表-3）に示す。設問は8項目、それぞれ、そうは思わない：1点、どちらかというとそうは思わない：2点、どちらともいえない：3点、どちらかというとそう思う：4点、そう思う：5点の5件法による回答を列記した。回答者が3名と少ないため一般化には至らないが。各実践協力者において、映像制作に関するスキルと知識が増加傾向にあることが示されている。

収穫、気づき	・動画の撮影時間が短くて、話している間にうまくかぶさらないことがあったので、今後は十分な長さで撮影をしたい。 ・視聴者に庭園の中に富太郎の気配を感じてもらいたく、庭の見える窓に貼られた富太郎のポートレートをインサートした。インサート用カットとギャラリートークの内容のつながりが重要。 ・普段から写真で撮影する様にしておくと、見どころをもっと知って映像で表現できるようになるかなと思います。ここから見たのが一番伝わるよっていうのを映像作るだけじゃなくても、案内する意味でも必要な物にもプラスになるかなと思います。 ・状況説明カットはちょっと最初馴染めませんでした。 ・作っていくうちに、理解が深まってきたと思いました。他の展示に行った時に動画とかを見る見方が少し変わってきました。これはすごい技なんだろうなということが分析できるようになりました。 ・構成を考えてから撮影することの大切さ（歌碑からスエコザサに移る動画を撮ったが、実際の話の流れでは逆だった。） ・話の長さや、どの順番・流れにするかを意識して話すことの重要性を実感した。 ・来園者向け映像としてではなく、非来園者に向けてインターネットで発信するときには状況説明カットがあった方がいいなと感じた。 ・普段よりちょっとアップで撮ると全然画の感じが変わってくるので、少し変えるだけでお客さん見る側としては違うと思いました。
今後の取組	＜継続可能性＞ ・今後引き続き、、して、いろいろやっていきたいと思う。 ・企画展の解説や、記念館の常設展の解説映像を作ってみたい。 ・ゆくゆくは、見学の疑似体験ができるような映像（ライブのような）を考えて、動きながら解説する学芸員を撮影するといったようなこともできるようになれたらと思います。 ＜発展＞ ・ギャラリートークの撮影以外、インサート用カットや状況説明カットなどは自分一人で撮影が可能。 ・基本的に植物は動かないので、どんなふうに動画を撮っていくべきなのか ・植物とお客様を絡めたカットは撮ってみたいです ・どんなふうに動画を発信すれば、多くの方に見てもらえて、来園につながるのかを検討してみたいです
課題、改善提案	＜資料映像について＞ ・資料映像としては、沖縄の「紅型」の映像が印象に残りました。あれはやっぱり一番身近に感じられました。 ・他館の学芸員解説など見本を見せてもらえたのは、どのように撮影すればいいかの参考としやすく、わかりやすかったです。 ＜ワークショップの進め方について＞ ・講演や論文との類似性で説明してもらうと、学芸員は理解しやすい。多分講演会とか論文は学芸員は、みんなやっていると思います。論文を書くとか、初めの導入部があって、本文の展開があって、最後の締めが必要なんですよと言うと、それが状況説明っていう理解につながると思います。 ・最初に説明をしてもらった際に、動画を見ることや2カット編集を「なぜやるのだろう」とやや暗中模索な感じがありました。個々の作業をすることで得られる効果を、ほのめかしてくれるといいのかもしれません ・実際に撮ってみることも重要ですが、1回目に構成を練ってどんな絵を入れるのかというのに、座学的に注力しても良かったように思います（絵コンテ的なものをつくる？）

表 2　振り返りインタビュー

No	設問	A			B			C		
		事前	事後	変化	事前	事後	変化	事前	事後	変化
1	あなたはカットとシーンの違いを説明することができますか？	4	5	1	1	3	2	1	4	3
2	あなたは状況説明のカットを撮影することができますか？	3	5	2	1	3	2	4	5	1
3	あなたはアップショットの表現効果を説明できると思いますか？	3	4	1	1	3	2	1	5	4
5	あなたはインサーカットを活用した表現を行うことができると思いますか？	4	5	1	1	4	3	5	5	0
6	あなたは、数分の映像を自分で編集することができると思いますか？	3	5	2	1	4	3	5	5	0
4	あなたからのメッセージを映像で他の人に伝えることができると思いますか？	4	4	0	4	4	0	4	4	0
7	あなたは、展示の魅力を映像で伝えることができると思いますか？	3	4	1	3	4	1	3	4	1
8	あなたは将来、映像による展示の解説を行っていくと思いますか？	4	5	1	5	5	0	5	5	0

表 3　事前事後アンケート

（８）最後に本研究の限界と課題について述べる。本研究では、ギャラリートークを題材とした映像制作支援パッケージの提案を目指している。今回の実践では、作品が完成したこと。提案した制作手順が用いられたことなどを提案内容の評価基準とした。今後の課題としては、より客観的な評価手法が必要であると考える。
今回の実践は個人記念館(植物学系)を対象とした。今後は歴史系博物館や美術館など対象を拡大した実践を行い、映像制作支援パッケージの活用範囲の拡大をはかりたい。

＜引用文献＞

西岡貞一,鈴木佳苗「博物館における映像発信の現状と課題」日本展示学会 41 回大会 (2021) p23−23
西岡貞一,久保埜企美子 他「鑑賞支援サービス拡大に向けた、学芸員による展示映像自作可能性の検討」日本展示学会 37 回大会（2018）p18−19
松葉竜司「コロナ禍、文化遺産の普及啓発をめぐって：YouTube 配信の現在とこれから」京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報 8 (2022) p61-64

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 西岡貞一、鈴木佳苗
２．発表標題 博物館における映像発信の現状と課題
３．学会等名 日本展示学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 西岡貞一
２．発表標題 大学生を対象とした制作実習科目のオンライン授業の実践と課題
３．学会等名 日本教育メディア学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 西岡貞一
２．発表標題 学芸員の映像制作を支援する映像パッケージの開発
３．学会等名 日本教育メディア学会研究会
４．発表年 2023年～2024年

１．発表者名 西岡貞一
２．発表標題 学芸員のための映像制作支援パッケージの提案
３．学会等名 日本展示学会
４．発表年 2023年～2024年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鈴木　佳苗 (Suzuki Kanae) (60334570)	筑波大学・図書館情報メディア系・教授 (12102)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関